

# 徳島県における乳幼児RSウイルス重症化予防対策 — 2020年の経過報告と2021年の方針について —

徳島大学病院 周産母子センター副センター長  
中川竜二

乳幼児のRSウイルス(以下RSV)感染症の重症化予防の薬として、パリビズマブ(シナジス®)が使用されています。人工的に合成されたモノクローナル抗体であるため効果は永続せず、1カ月に1回の筋肉注射が必要で、早産児などのハイリスク児に対して流行期(およそ8カ月間)に投与することが推奨されています。

全国のRSVの流行状況は、かつては冬期にピークがありました。2017年からの3年間は7月に流行が始まり、9月から10月に流行のピークを迎え、冬期にはピークアウトしました。この状況を踏まえて日本小児科学会は、2019年に「都道府県ごとに各年度の投与開始月を統一することが望ましい」「各都道府県内で周産期医療やその他パリビズマブ投与に関わる小児科医等が中心となって審議し、投与開始月と投与期間・回数などの検討を行うことが望ましい」とのガイドラインを発表しました。それをうけ、2020年3月の本協議会において、本県におけるパリビズマブ投与時期についてご検討いただき、以下のような方針で御了承をいただきました。

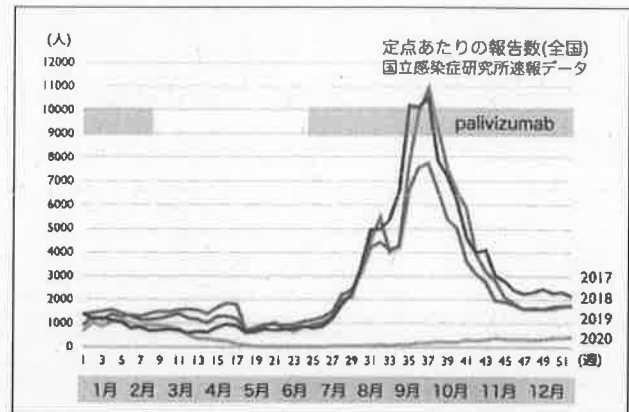
- (1) 徳島県においては7月1日よりパリビズマブ投与を開始する
- (2) 標準的な投与期間は翌年2月末までとする
- (3) 標準的な投与回数は8回を目安とする
- (4) 終了時期については流行状況に応じて柔軟性をもって対応する

### 【現状報告】

2017年から2020年の全国のRSV流行状況です(図)。2020年は流行予測と現実の流行状況が大きく異なり、夏季から秋期にかけて流行はみられませんでした。これはSARS-CoV-2の流行により国民の意識が高まり、「三密を避ける」「手指衛生とうがい」など感染予防対策の励行が、小児の感染症の流行抑制にも繋がったと推測されます。なお九州地方では冬期にRSVの流行が始まっており、2021年の第1週から第5週の報告数も九州地方は突出して多いですが(表)、人の移動が制限されているためか、今のところ他の地域へ流行が波及している様子はありません。

### 【今後の対策】

現状では本県の2021年のRSV流行予想は困難です。国立感染症研究所が行っている感染症発生動向調査 (<https://www.niid.go.jp/niid/ja/idwr.html>) の週報の「定点あたりの報告数」をこまめに参照し、臨機応変に対応するのが現実的だと思われます。Yamagamiらは計算式



2017年から2020年の全国のRSV流行状況

	01週	02週	03週	04週	05週
北海道	1	1	3	0	1
東北地方	20	18	28	48	43
関東地方	8	16	17	21	18
中部地方	3	7	5	17	15
近畿地方	19	43	110	87	127
中国地方	4	4	10	11	14
四国地方	0	1	7	0	5
九州地方	176	222	433	517	535
沖縄県	27	12	39	49	26

各地方における2021年第1週から第5週の報告数の集計

を用いて各都道府県のRSV流行開始の目安を報告しており、それによると本県は定点あたりの報告数が「1.00」を超えた時点で流行開始とみなされますが<sup>1)</sup>、2021年の本県の定点あたりの報告数は「第1週：0」「第2週：0.04」「第3週：0.26」「第4週：0」「第5週：0.22」という状況で、未だ流行はみられません。

この現状を踏まえて、2021年の本県のパリビズマブ投与方針をご検討いただきたく存じます。私案として、以下の方針を提案したいと思います。

- (1) 2021年は昨年の投与方針を踏襲する
- (2) 2021年3月から6月にかけて、定点あたりの報告数が「1.00」を超えて流行開始と判断された場合、対象となるハイリスク児は投与を検討する
- (3) 投与時期が「7月から翌年2月」を大きく外れた場合は、症状詳記の添付を考慮する

ご検討のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます

### 【文献】

1. Yamagami H, Kimura H, Hashimoto T, Kusakawa I, Kusuda S. Detection of the Onset of the Epidemic Period of Respiratory Syncytial Virus Infection in Japan. Front Public Health. 2019 Mar 7;7:39